

《研究ノート》

アウグスタ・ラウリカ

—— スイスのローマ都市の衰退について ——

南 川 高 志

I

世界帝国となったローマを、属州とされた領域、とくに後にヨーロッパの中核となっていくアルプスの北の地域に視点を置いて考察する研究は、ローマ市やイタリアを中心に考える伝統的な研究とは異なる成果をもたらすことが期待され、帝国衰亡の過程を考える際にも重要な作業と思われる。ところで、アルプス以北のガリア、ゲルマニア、ブリタンニアなどの諸属州には、帝政前期、数多くの都市が栄えたが、それらがどのくらいの規模であり、また古代の終焉期にかけてどのような歴史的経過を歩んだのかを、代表的な都市についてだけでも最新の考古学的調査や研究の成果を踏まえつつ理解しておくことが、帝国大の政治史の新たな構築を目指す際にも必要であろう。この小論では、スイス地域に存在したローマ都市アウグスタ・ラウリカの形成・発展・変容を概観し、現在見られる遺跡を紹介しつつ、5世紀の初めに機能しなくなったといわれるこの都市の終焉を考えてみたいと思う。

アウグスタ・ラウリカの遺跡について、初めて学術的な発掘作業がなされたのは16世紀のことである。最寄りの都市バーゼルの商人、アンドレアス・リッフが始めていた作業を、人文主義者で法学者でもあったバジリウス・アマーバッハが引き継いで実施した。ロダン作の彫刻「カレーの市民」が玄関ホールにあることで知られるバーゼルの美術館（Kunstmuseum）の古い収蔵品は、このアマーバッハのコレクションであり、それを1661年に市が買い上げて、美術館を開設したのである。アマーバッハの活躍の後、発掘は地域のあちこちでなされたが、19世紀後半になり、バーゼル歴史考古学協会が本格的な研究発掘を行うようになって、今日まで継続する調査が始まることとなった。

これまでに膨大な発掘報告書が刊行されており、研究書も出されているが、最新の成果を踏まえた包括的な書物は、2012年刊行の Ludwig Berger, *Führer durch Augusta Raurica*, Schwabe Verlag Basel である。この書物は、1937年に刊行された同名の書を、新しい発掘成果を加えて改訂を重ねた第7版である。遺跡現地で販売されている案内書 Barbara Pfäffli, *A Short Guide to Augusta Raurica*, Augst 2010 も簡便で参考になる¹⁾。本稿での遺跡や展示物の紹介は、原則として Berger と Pfäffli の解説に拠っている。なお、以下の文章に添えた写真は、すべて筆者自身が写したものである²⁾。

II

ローマ時代、現在のスイス地方はイタリアからガリアやゲルマニアへと至る交通の要の地域であった。アルプス山脈の北へと侵攻したローマは、カエサルからアウグストゥスの時代にスイス各地に砦や町を築き始めた。現在も各地で遺跡・遺構や出土物を見ることができる。私が実際に訪れ観察した遺跡は、ニヨン、アヴァンシュ、ヴィンディッシュ（ローマ名ウィンドニッサ）、そして、ここで紹介するアウグスタ・ラウリカの4箇所に過ぎない。しかし、いずれも個性豊かで、訪れると忘れがたい印象深い遺跡群である。

ニヨンはジュネーヴとローザンヌの間のレマン湖畔にある町で、カエサルの建てた植民市であった。湖畔の遊歩道に復元された神殿の円柱（写真 A）や、バシリカの跡が分かるように示されている博物館（写真 B）がある。ベルンの西方にあるアヴァンシュは、アウグストゥスによって建てられ、1～2世紀には人口が1万人を越えた規模の大きな町だった。8000人を収容したといわれる円形闘技場が残り、現在も催しに使われている（写真 C）。1939年にマルクス・アウレリウス帝の黄金製の胸像が見つかったところでもある³⁾。バーゼルの東方、ヴィンディッシュにあるウィンドニッサ遺跡には、大きな円形闘技場の跡が残る（写真 D）。



(写真 A)



(写真 B)



(写真 C)



(写真 D)

長径 112 メートル，短径 98 メートル，おおよそ 1 万人を収容したと推定されている。

アウグスタ・ラウリカは，ドイツ，フランスと国境を接するバーゼル市の郊外，10 キロほど東のアウグスト（Augst）にある遺跡である。バーゼル中心部からはバスでも列車でもごく簡単に訪ねることができる。鉄道なら，バーゼルのスイス国鉄駅から遺跡に近いカイザーアウグスト（Kaiseraugst）駅まで，ローカル線（S バーン）に乗れば，10 分少々，数駅で到着する。ただし，駅から遺跡の中心となる博物館までは 15 分ほど歩くことになる。バスも同様。そして，広範囲に広がる遺跡群をくまなく見て回ろうとすれば，かなり歩くことを覚悟せねばならない。

さて，ローマ人がやって来る以前，バーゼル地方には，いわゆる「ケルト」系の先住者がいた。ラウリキ族と呼ばれる人々である⁴⁾。彼らは，紀元前 58 年頃に西に向かって移動したが，ローマ軍を率いるカエサルとの間でヘルウェティ戦争と呼ばれる戦いをして敗れ，元の地に舞い戻るようになった。まもなく，ライン川までのガリア地域はローマの支配下に入ることになった。アウグスタ・ラウリカの起源は，カエサルが派遣していた総督ルキウス・ムナティウス・プランクスによって，前 44 年の夏頃に，ラウリキ族の住地に建てられた植民市（Colonia Augusta Raurica）⁵⁾であった。

カエサル死後の内乱を経て，オクタウィアヌスがアウグストゥスの称号を受け権力を掌握した後，おそらく前 15 年以降，現在のアウグスト地区にアウグスタ・ラウリカの市街地が，より北のライン川に比較的近い現在のカイザーアウグスト地区に要塞が作られて，定住地として次第に発展していった。町は正式名では，Colonia Paterna Pia Apollinaris Augusta Emerita Raurica と呼ばれた。

1 世紀中頃以降，アウグスト地区に作られていた市街地の公共建築物は石造になり，次第にローマ都市にふさわしい外観を得るようになった。フォルム，バシリカとクリア，劇場，円形闘技場，公共浴場など，施設も整うようになった。2 世紀には，町の人口は 1 万 5 千人程度になったと推測されている。居住者は，ローマ軍の退役兵に始まったが，やがて先住のラウリキ族の人々もこれに加わって都市民となり，アルプス以北の属州都市に共通の「混雑」状態が実現していったと考えられる。

現在，遺跡はおもにアウグスト地区に広く散在している。土地に起伏があることもあって，ローマ時代の整った町並みを想像するのは容易でないが，発掘調査の結果，ローマ都市らしく，町は道路が直角に交差し，格子状街区を持ち，居住区（insulae）が整備されていたことが明らかになっている。

次に，現在観察できる公共建築物の遺跡などを簡潔に紹介し，最盛期のこの都市の状態を確認しておきたい。

III

アウグスタ・ラウリカ遺跡の中心といってよい場所に、1955年に建てられた博物館がある。展示された発掘品のうち最も注目すべき物は銀器であるが、これについては、後期ローマ帝国時代の品ゆえ、第IV章で述べることにする。

この博物館に隣接して、ローマ時代の都市住民の家が再現されている。当時の暮らしぶりを、居室・食堂や台所、工房や信仰の場であるラリウム、そしてトイレの様子まで、設備に加え、人形も使って再現している。博物館の展示室と同様に、格好の歴史教育の場になっており、筆者は2度目の訪問時、遠足で先生に連れられてきている子どもたちを大勢見かけた⁶⁾。

この博物館の道路を挟んだ向かいに、遺跡群の中で抜きん出てよく復元され目立つといってよい劇場がある（写真E）。この劇場は、70年頃に建設され、280年頃までは使用されていたと考えられている。現在は、2000人程度が座ることができる規模で座席部分が復元され、イベントなどに用いられているが、ローマ帝国最盛期の頃のこの劇場は、座席の列が3層から成る、もっと規模の大きな施設であった。1万人の観衆を収容できたと推測されている。不使用に帰した後、外壁を作る石灰岩など石材が奪われて、荒廃してしまった。

この劇場に向き合う小高い丘（シェーンビュール丘）には神殿の遺構（写真F）がある。この丘には紀元50年頃からいくつもの社が作られていたが、70年頃には大きな神殿が作られて、劇場の舞台から進んで階段を登り、社へと入ることができるように整えられた。この



アウグスタ・ラウリカ地図



(写真E)



(写真F)

神殿、神域も3世紀の終わり頃には不使用となって、石材供給の場所となってしまった。

また、劇場の背後、北東にフォルムとその神殿があり、さらにバシリカが設けられていた。他のローマ都市と同様、このフォルムはアウグスタ・ラウリカの人々にとっても生活の中心であった。1世紀前半に最初のフォルムが作られたが、50年頃に改造され、さらに150年頃に最終的に形が出来上がったとみられている。フォルムの中には神殿があったが、遺跡を訪ねる者に神殿の規模が分かるよう、現在、正面の屋根や柱の骨格だけ再現されている（写真G）。

フォルムに隣接するバシリカは、この町の行政・司法のための建物である。1世紀の末に火災で壊れた跡に、より大きなサイズで再建された。その長方形の建物の端には、半円形のクリア、すなわちこの町の都市参事会の会員が集まって協議をする議事堂が接合されていた。現在、クリアの基礎部分が再現されている（写真H）が、その規模からして、この町の都市参事会員の数は100人程度と想定される。



（写真 G）



（写真 H）

このフォルムやバシリカの近くには公共浴場の遺跡が見られ、浴場の近くには、地下室状の井戸小屋が見つかった。1998年に発見されたこの地下室は、外部とはトンネルで繋がれ、丸屋根構造で、井戸の深さは11メートルもあった。ローマ時代から手つかずのまま発見されたこの井戸小屋では、6000個に及ぶ貨幣の陶製鋳型が発見されている。公共浴場は250年頃に使われなくなり、井戸も同じ頃に使われなくなったと考えられる。井戸の調査で、数体の人骨が発見されてもいる。

庶民の生活の跡も、あちこちに残っている。博物館の直ぐ近くに、タベルナ、つまり飲食店の遺跡が見つかった。劇場近くにある工房の跡でも、建物や内部が再現されている。さらに、アウグスタ・ラウリカの南部、現在のリスタルにある川から町に水を供給するため、1世紀から3世紀まで、高さ1.8メートルの石造のトンネル状をなした水道が、6.5キロに渡って働いていた。

剣闘士競技場の跡は、遺跡群の中心から南西方向に少々離れたところに見られる（写真I）。170年頃の建造と思われ、16の入口を備えて13,000人を収容できたと推測されている。しかし、現在では、林の中に平板な跡地の地面が残るのみで、ローマ時代の偉容は想像でき

ない状態である。剣闘士競技の見世物はこのアウグスタ・ラウリカの地でも人気のある娯楽であった。そのことは、この地から出土した剣闘士の戦いを描いたモザイクなどで推察することができる。

今日見学できるおもな公共建築物は、以上である。これら以外に、神域などの遺構が発見されている。また、墓地の跡も、これまで紹介した市街地の東西で発見されている。



(写真 I)

IV

アウグスタ・ラウリカはどのように衰退したのだろうか。前章まで述べてきた帝政前期の繁栄の概観を踏まえて、若干の考察を試みることにしよう。

3世紀以降のアウグスタ・ラウリカについては、発掘成果に基づいて、おおむね次のように説明されている。すなわち、250年代末に生じた防壁（リメス）の崩壊とアラマンニ族の襲撃で、この都市は大きな被害を受けた。町は荒廃し、市街地のかなりの部分はうち捨てられた。また、劇場前の丘の部分が防壁に囲まれ、堀が回られるようになった。4世紀に入ると、これを放棄して、ライン川に近い場所に、新しい要塞が建てられた。カストルム・ラウラケンセ（Castrum Rauracense）である。これによって、アウグスタ・ラウリカは再び帝国の拠点として息を吹き返した。けれども、350年代の初めに再び外部の部族の襲撃を受けて甚大な被害を出した。その後、360年代後半にヴァレンティニアヌス1世（在位364～375年）の軍事政策でこの地の強化がなされたが、4世紀末にかけて次第にローマ軍が撤退する中で、5世紀初めにこの地も軍事的な拠点としての機能を失った。

以上が、ローマ都市アウグスタ・ラウリカの衰退に関する一般的な説明である。遺跡調査の成果により、公共建築物が不使用に帰した時期などが判明しており、その年代を基軸として、都市の機能の衰退過程が今日詳しく明らかになっている。以上の説明に対して、筆者も特に異論はない。しかし、建物の不使用と町の機能の変化や衰退とは幾分か様相が異なる可能性がある。以下では、4世紀以降のこの都市について、若干の考察を加えつつ論じてみたい。その際、筆者は、文献を主たる研究材料とする歴史研究者として、アンミアヌス・マルケリヌス『歴史』を用いることにする。4世紀の最も重要な歴史書とされるこの作品に、この地に関わる言及があるからである。

前章で言及したように、この都市の公共建築物の多くが使われなくなったのは、3世紀の後半であった。これらの施設は、最盛期のこの都市の繁栄を象徴するものであり、それが使用されなくなったということは、都市住民が活力と財力を失い、人口も減少したことを意味

している。3世紀の終わり頃には、劇場前のシェンビュール丘を城壁と堀が取り囲み、少なくなった市民たちの生活の場所と避難所の役割をなしていた。

ディオクレティアヌス治世の300年頃、ライン川岸に沿って新要塞カストルム・ラウラケンセが建てられた。現在も、新要塞の周囲を囲んだ防壁の一部が遺跡として残っている（写真J）。この要塞は、平面プランは角が取れた長方形で、辺境地帯に一般的に見られるローマ軍の要塞と同じだが、四方を囲む壁の高さは8～10メートルもあり、兵士が暮らす兵舎だけでなく、一般人も同じようにこの要塞内で生活していたようである。新要塞



（写真 J）

要塞を守る防壁の内側でライン川沿いの地に、公共浴場の遺跡が見つかったが、これは新要塞よりも早く作られていたもののようで、新要塞建設後も使われ続けたらしい。

この新要塞の建設には大量の石材が必要であった。使われなくなった最盛期の市街地、とくにその公共建築物から石材が多く奪い取られたのはいうまでもない。この段階で、もはや最盛期の町に戻ることは不可能となった。

新要塞建設の後、とくにコンスタンティヌス大帝の治世では、帝国が強勢で外部からの攻撃は多くはなかった。アウグスタ・ラウリカも新要塞を中心に、軍事拠点として、定住地として、機能していたと思われる。最盛期にライン川の対岸に向けて架けられていた橋は、3世紀後半に破壊されたが、4世紀には、最盛期とは場所を変えて、この新要塞から対岸へと橋が架けられた。

337年にコンスタンティヌス大帝が世を去り、3子で帝国を分割していたが、340年長兄のコンスタンティヌス2世が末弟のコンスタンスと争って敗死し、帝国の西半全部をコンスタンスが統治することとなった。そのコンスタンスも、350年に将軍マグネンティウスのクーデタによって殺害されてしまった。コンスタンスの兄で帝国の東半部を統治していたコンスタンティウス2世は、マグネンティウスを打倒するため西へと軍を進め、351年にムルサ（現在のクロアチアのオシエク）での戦いでマグネンティウス軍を破り、353年にはマグネンティウスを自殺に追い込んで、唯一のローマ皇帝となった。アウグスタ・ラウリカは、コンスタンティウス2世とマグネンティウスとが対立していた、まさにその時期に、外部からの襲撃を受けた。おそらく、352年の晩夏までの出来事と考えられている⁷⁾。アウグスタ・ラウリカに言及する多くの現代の書物が、この時でこの定住地は役割を終えたような記述の仕方をしている。しかし、この襲撃で実際に定住地がどのくらいのダメージを受けたのかは、正確には知ることはできない。

この事件に関連して、興味深い出土物がある。先に、アウグスタ・ラウリカの博物館の注

目すべき展示品として銀器があることに言及した。出土した銀器は270点に上り、重さにして純銀57.5キログラムになる、まさに宝物である。これらのうちの重要なものは、1961年から1962年にかけての冬に、カイザーアウクストの地元の女性、マリー・シュミット夫人が自分の土地で偶然見つけたものであった。とくに多数の大皿が発見されたが、最も華やかな円形の大きな銀皿には、その中心部分に、金をたくさん用いた絵が描かれている。海とウィッラの絵で、海には魚がたくさん描かれている。海沿いの邸宅での豊かな生活ぶりを示している。これらの銀器の最後の所有者として、一人、ないし2人の高級軍人が想定されている。さらに、この出土物には、1キログラム近い重さの銀の鑄塊（インゴット）が含まれているが、その中心部分にマグネンティウスの像が刻まれている。この地は篡奪帝マグネンティウスの支配下にあった。これらの銀器は新要塞の敷地内に退蔵された。しかし、それがマグネンティウスとコンスタンティウス2世との戦いに関連してなされたのか、それとも外部からの侵入に備えてなされたのかは、判断が難しい。

史料の記述や考古学調査の結果から、350年代初めに攻撃やそれによる定住地の混乱があったことは確かとみられる。しかし、アンミアヌスの記述を今少し視野を広げて眺めると、350年代中頃には、新要塞を中心とするこの地が再び勢いを取り戻していたことも推測される。『歴史』第15巻には、「ビソンティウム（現在のフランスのブザンソン）とこのラウリカが属州⁸⁾で他の多くの都市よりも重要である」⁹⁾と書かれている。これは、350年代前半の記述の間に挟み込まれた記事であるので、この頃にアウグスタ・ラウリカが機能していたことの証左と考えてよい。

続くユリアヌス（背教者）の副帝時代（副帝在位355～360年）、アウグスタ・ラウリカはしばしば軍事拠点として登場する。357年、皇帝コンスタンティウス2世の意を受けて、将軍バルバティオが、ガリアにいるユリアヌスと共同してアラマンニ族を挟撃しようと出撃したが、宮廷のあるミラノから遠征に赴いたその軍は、このアウグスタ・ラウリカに陣を置き、この作戦に出撃していった¹⁰⁾。

この挟撃作戦は、バルバティオ軍がアラマンニ族の攻撃を受けて退却してしまい、失敗に終わった。そのため、ユリアヌスがただ一人、軍を率いてアラマンニ族の大軍と戦わねばならなくなった。それがストラスブールの戦いで、ユリアヌス軍が予想外の大勝利を収めることになった。この戦いの後、ユリアヌスはアラマンニ族に対して攻勢に出ると、アウグスタ・ラウリカを対アラマンニ族政策の拠点とした¹¹⁾。さらに、ユリアヌスは、360年にパリで皇帝に宣言され、コンスタンティウス2世と対立すると、東へと軍を動かす際に、やはりアウグスタ・ラウリカを拠点とした¹²⁾。少なくとも、ユリアヌス帝治世までは、この地は軍の拠点として充分機能していたのである。

ユリアヌス死後、ライン川に沿った辺境地帯の掌握に努めたヴァレンティニアヌス1世は、369年頃にこの地の強化に乗りだし、陣営の近くにつけられたライン川を渡る橋の対岸に城塞を築かせた。8つの塔を持つ要塞は、今は基壇の一部が残るだけである。この地を拠

点にし、ライン上流辺境をコントロールしようとしたのである。

しかし、ヴァレンティニアヌス1世の死後、辺境コントロールはできなくなっていた。5世紀の初め、イタリア防衛のため、ローマ軍がライン川沿岸から撤退するようになると、この地も軍事拠点の意義を失った。しかし、次の時代は始まっていた。すでに4世紀初め、この地でもキリスト教徒の存在が知られ、340年頃、ユスティニアヌスなる者が司教となっている¹³⁾。さらに、新要塞防壁内のライン川沿いの部分に360年から400年頃の間、最初の教会が建てられている。教会の身廊は広さが18メートル×10メートルあり、当時としてはかなり大きなものだった。新要塞の南東方向、鉄道カイザーアウグスト駅のやや南西には、4世紀から7世紀にかけて使用された墓地がある。7世紀あたりまで、この地は居住地として機能していたらしい。やがて人々の活躍の舞台は、西のバシリア、すなわちパーゼル市に移ることになる。

V

アウグスタ・ラウリカは、3世紀後半まではローマ帝国の軍隊駐屯線から離れていたが、リメスが破られアグリ・デクマテスがローマ帝国領からアラマンニ族の居住空間（アラマンニア）に変貌して以来、軍隊駐屯線上の定住地となってしまった¹⁴⁾。最盛期の都市の公共施設や居住街区は大部分、この後遠からずして不使用に帰した。ローマ都市としてのアウグスタ・ラウリカは、この時に終焉したということになる。

ただ、場所を変え、新要塞内に軍事拠点と民間人居住地を持つ定住地としてのアウグスタ・ラウリカは、その後も存続した。そこでは、公共浴場を使用するローマ風の生活が営まれ、贅沢な銀器が用いられる食卓があった。キリスト教も信仰されつつあった。1世紀間以上に及ぶこの段階は、単純に「衰退」と解釈するだけでよいのだろうか。

ローマ帝国終焉期のアルプス以北の地域については、外部部族の侵攻で都市域全部が一挙に破壊されてしまったところもあるが、都市住民が様々な対応を見せて、町を縮小しながらも新たな居住空間を築いたり、移動して来た人々と新しい社会関係を構築したりしていったところもある。本稿で扱ったアウグスタ・ラウリカは、ローマ帝国のアルプス以北地域の拠点として、1～2世紀に大きな意義を持った都市であった。その町は、「三世紀の危機」の時代に主たる市街地は荒廃に帰したが、姿を変えて4世紀末までその意義を保った。そして、5世紀初めにはついにローマ人の軍事拠点の役割を終えている。他の都市との比較検討を重ねる必要はあるが、ローマ帝国西半におけるローマ風の生活が都市でどのように実践され、継続し、終焉したのか、アウグスタ・ラウリカの例は比較的わかりやすく教えてくれるように思われる。

最後に、カイザーアウグスト地区で発見された1碑文¹⁵⁾に、興味深い名称が刻まれていることを紹介して、擱筆したい。この碑文は、4世紀初頭のディオクレティアヌスとマクシ

ミアヌスの両皇帝に捧げられたものか、4世紀後半のヴァレンティニアヌス、ヴァレンス、グラティアヌスの諸皇帝に捧げられたものか、研究者の見解が分かれているが、伝統的な補いによる読みは、後者である。この碑文には、壁（*murus*）を兵士たちが修復したことが刻まれている。そこでは、「マギドゥヌム」（*Magidunum*）の壁を修復したと書かれている。伝統的な補いによる碑文の読み方では、ヴァレンティニアヌス1世の治世の370年頃に、リングネス族の兵士たちがこれを行ったと解する。マギドゥヌムはいわゆる「ケルト風」の名前で、リングネス族も「ケルト」系の部族である¹⁶⁾。伝統的な読みが正しければ、またマギドゥヌムがこの地を指しているならば、4世紀後半には、この地に駐留する兵士たちにとって、おそらく帝政初期の補助軍兵士の基地として使用されていた時のこの地の名称が、ローマ風の名前よりも身近なものになっていたということになる。この碑文が、ローマ風の生活が失われてゆきつつある時期に、ローマ到来初期の部族定住地の名称が再び現れたのを示しているのだとすれば、4世紀の属州都市の変化については、市街地における公共建築物の不使用などの考古学的な観察だけではなく、社会の各層、多様な住民に目を配りながら、社会や文化の深層での変化を読み取っていかねばならないことになるだろう。

註

- 1) 他に、ローマ時代のスイス地域の解説書として、W. Drack u. R. Fellmann, *Die Schweiz zur Römerzeit*, Zürich u. München, 1991 が有用である。
- 2) 本稿作成に当たり、数々の助言をくださったバーゼル大学名誉教授 Jürgen von Ungern-Sternberg 先生に感謝申し上げる。
- 3) 現在現地の博物館に展示されているものはコピーである。オリジナルは、ローザンヌの州立考古歴史博物館に展示されている。
- 4) Plinius, *NH*, IV, 106.
- 5) *CIL*, X, 6087 = *ILS* 886.
- 6) 最初の訪問時（1996年）に比べて、二度目の訪問時（2014年）には、広く散策しながら見学できるように遺跡敷地が整備され、博物館の展示も、後述する宝物の銀器などで拡充されて、見学者には訪れる価値の高い場所となっていると筆者は感じた。
- 7) L. Berger, *Führer durch Augusta Raurica*, Basel, 2012, 27
- 8) *Provincia Maxima Sequanorum*
- 9) Ammianus Marcellinus (= AM), XV, 11, 6
- 10) AM, XVI, 11, 2.
- 11) AM, XX, 10, 3.
- 12) AM, XXI, 8, 1.
- 13) Berger, *op. cit.*, 335-340; Barbara Pfäffli, *A Short Guide to Augusta Raurica*, Augst, 2010, 81.
- 14) 例えば、AM, XVIII, 2, 16 に拠れば、350年代末、ラウリカのライン川対岸は、アラマンニ族のウァドマリウスの領地だった。
- 15) *CIL*, XIII, 11543 このラテン語碑文の伝統的な補いの読みは、以下の通り。[D(omini)n(o)stri] Valentinianus / Valens et Gratianus per[p(etui) / tr(iumphatores) semp(er) Aug(usti) mu]rum Magid(unensem) / [refecerun]t curante [...]// [...]pr(aefecto) mill(itum) Li(n)g(onum).
- 16) Berger, *op.cit.*, 31.

（本稿は、科学研究費基盤研究（B）「古代ギリシア・ローマ史における新しい「衰退論」構築に向けた統合的研究の試み」（南川高志代表）による研究成果の一部である。）